

IMAJ

NEWS NO.99

(社) 国際MRA日本協会機関誌

発行年月日 2002年2月25日

発行所 (社) 国際MRA日本協会

150-0022 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5

東光苑マンション802

TEL:03-5721-6861 FAX:03-5724-6880

E-mail: LEB03055@nifty.ne.jp

発行人 橋本 徹

編集人 長野 清志

頒 価 1部200円

『グローバル・ホーホーがインドで開催される』

開催期間：2001年12月30日（日）～2002年1月20日（日）

[2001年12月30日（日）～2002年1月10日（木）の約2週間をピークタイムとする]

開催場所：インド、アジア・プラトーマRAセンター

40ヶ国から250名余が参加

ホーホーとはインドの東北部のナガランド州のナガ族の言葉で『重要な事項を話し合うための集まり』の意味です。今回上記の日程で、約40ヶ国から今後10年～20年にわたって世界中でMRA活動を推進していこうという気持ちをもった様々な背景から成る250人程の参加者が集まり、ゆったりとした雰囲気の中で天からのインスピレーションを求めると共に、お互いにより良く知り合い一つのチームになれるよう交流を重ねました。日本からは、アジアセンターODAWARAの中山啓介所長、若い会社員の太田敦之さんと山田裕子さん、そして、兼松恵さん、マリアン

ネ和田さん、及び、MRA事務局の長野清志の5名が参加しました。

お互いにより良く知り合うという目的のためには、食事やお茶の時間を共にすることは勿論ですが、特に小グループに分かれ、それぞれが現在の自分に至らしめた人生の契機の数々を率直に話し合ったことは、それまでのお互いへの見方を変え、より深く近い関係にするためにとても有効でした。又、イスラム教徒の参加者からは、イスラム教の考え方が紹介されると共に、ヒンズー教についての説明の夕べを初め、色々な国々や文化の紹介が毎日のようにあったことも、多様な考え方や文化を学ぶ上でとても有意



■ 主な内容 ■

◆ 『グローバル・ホーホー会議』 レポート・1-4P

◆ 例会基調講演要約・9-11P

◆ コー政治円卓会議の歩み・5P

◆ MRA ニュース短信・11P

◆ CRT 部会ニュース・6P

◆ コー世界大会案内・12P

◆ セネガルと就学前教育・6-8P

◆ 事務局便り・12P

義でした。同時に、各国の歌や踊りや寸劇等の出し物やフォークダンスに興じながら楽しい大晦日を過ごし、新年の瞬間をお互いに抱擁しながら祝い合った時には、まさに国境を超えた世界家族を実感した次第です。

又、過去のMRAの活動の中で良かった点、誤っていた点等についても総ざらいをし、率直な意見交換を通して、今後プラスの点をどう伸ばすかということも話し合われました。同時に、アフリカ諸国における深刻なエイズや汚職等々の問題など、それぞれの国の直面している一番の課題とMRAとしてそれにどう取り組もうとしているのかについても報告し合いました。

更に、今回の大きな目的であった実現可能なビジョンを共有するために、それらビジョンへのインスピレーションを求め、又、その内容をお互いに披瀝し話し合う時間が十分にとられました。

この会議を通して、各自のビジョンは次のような共通のビジョンに集約されていきました。今後は、これらのビジョンを各国のMRAに持ち帰り、話し合い、それらのビジョンに共鳴し合う人々で力を合わせ、実現化していくことが必要となります。以下にそれらビジョンの概要を記します。

共通のビジョン

1. アフガニスタンに対するアクション

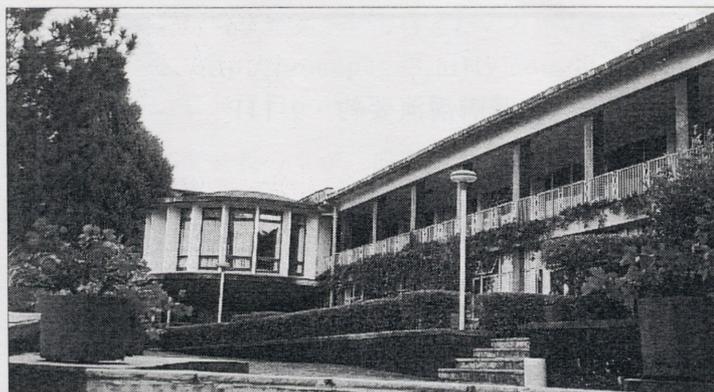
【アフガニスタンの人々が国の再建と和解を図る上で、MRAは独自の役割を果たしうる】

- ・2002～2004年の各年、コー・スカラース・プログラム（コーにおいて紛争解決・平和構築の理念と技術を1ヶ月にわたって学ぶコース）に異なった部族からの2名の参加者を募る。
- ・小グループでアフガニスタンを訪れ状況を判断し、アフガニスタンのチームの構築を図り、今後の訪問の準備をする。
- ・機を見てペシャワルの他のNGOの一角に拠点を設け、アフガニスタン人かパキスタン人のスタッフを置けるようにする。
- ・既存のもので使えるもの、良いインスピレーションを与えられるような海外及びアフガニスタンでのチェンジのストーリーを用いて新しく作るべきものなど、どのようなビデオが役に立つかを探る。
- ・タリバン政権時代においても教育の継続に尽くした女性の実話等をまとめて世界のメディアに伝える。
- ・ロシアとインドの再建と和解に果たせる役割を探る。（アジア・プラトーの利用）
- ・上記の数々のプロジェクトの実現を可能にするため、アフガン・ファンドをA f R（「和解への課題」）基金の下にサブ・ファンドとして発足させる。（各国で寄付を募る）

2. アフリカでのアクション

【MRAが行っているクリーン・ケニア・キャンペーンの体験をアフリカ大陸全般に広げ、クリーン・アフリカ・キャンペーンを展開し、貧困、汚職、そしてエイズ等の大きな課題の解決に取り組む】

- ・ケニアのナイロビで今年の5月30日から6月2日にかけて開催されるMRA汎アフリカ会議でこのクリーン・アフリカ・キャンペーンをスタートさせる。
- ・アフリカ各地でリーダーの資質を備える青年達にモラル・リーダーシップの訓練を行えるような「巡回チーム」を作り上げる。
- ・アフリカの音楽家、ダンサー、そして、演劇人から成る音楽劇を作りアフリカ内を回る。
- ・アフリカの人々のチェンジの体験を収録したビデオを作成する。
- ・フランス語圏のアフリカ諸国を包含すると共に、大湖（グレート・レイク）地方（ウガンダ、ルワンダ、ブルンジ、タンザニア、コンゴ、ケニア等）での和解のための対話を継続する。



●インドのMRAセンター、アジア・プラトー



●会議の様子

- ・ホーホーに参加しなかったアフリカ南部の国々のMRAチームと連携を取る。
- ・故国以外に住むアフリカ人とも連携を取る。

3. 世界で『家庭を開放し、こころに耳を傾ける』のテーマで活動を行う

【2002年の6月1日に『家庭を開放し、こころに耳を傾ける』のテーマの下、自分のこころと家庭をオープンにして普段は会うことの少ない自分と違うコミュニティに属する人、家族、或いはグループを招き宗教や人種や社会的な障壁を超えられるような機会を作る。それは、理解と和解と正義のための関係を構築するスタートとなり得る。】

- ・個人やコミュニティのイニシアチブで、家庭等で食事を共にしたり、コミュニティ同士の集まりなどを企画する。
- ・9月11日、12月25日等、色々な国で特別な意味をもつ日に焦点を当てて行事を行う。
- ・この機会を使って他のグループやNGOやメディアとネットワークを作る。
- ・このビジョンや、それをどう実行するかや連絡先やホームページ等を印した葉（しおり）や車のステッカーをMRA/ICのロゴを加えて作る。

4. 貧困とグローバリゼーション

【世界の人口の半数が一日2ドル以下で生活している。貧困の根本的な原因が基本的には道義的な問題によるということ発言して行く必要がある。貧困の解消が、この20年来で初めて、再び世界の関心事になりつつある。各国政府、NGO、そして国際諸機関がこのチャレンジに対し長年に亘り懸命に努力してきたことを認識しつつもMRAは、人間性や動機を変革することの重要性を強調することにより独自の貢献を果たせるものと考えている】

- ・アジア・プラトー等で政策立案者や草の根レベルの人々を結びつけチェンジと開発の実例を示す『開発のための対話』を開催する。さらに諸々の国際会議への参加を通してこの要素を紹介していく。
- ・グローバリゼーション論議に関わる人々やグループ間で「率直な会話」が出来るようにする。
- ・グローバリゼーションを全ての人類を利するものとするために、それをテーマとした本年のコー産業人会議、同じく「人間の安全保障」をテーマとした『和解への課題』の会議、そしてCRT等への参加者を含む、産業に魂を注入しようと奮闘努力している人々を支持する。
- ・汚職に反対する活動を維持・強化する。例えば、6月のパプア・ニューギニアの国政選挙で選挙浄化運動が計画されている。又、インドのグジュラート州では千人ほどの人々を巻き込んで汚職に対して闘う行動計画が作成されつつある。
- ・各国の難民の人々が、西側社会の人々に世界の現実を知らしめ目覚めさせる役割を担えるよう、それぞれの国のMRAのチームが働きかける。又、このグローバリゼーションと貧困の問題を出来るだけ多くのMRAのメンバーに学んでもらえるよう勇気付ける。

5. リーダーシップの訓練と開発

【MRAの世界戦略の発展を促進するため、現在のMRAの持つ強さと共に将来のリーダーシップの訓練と開発に必要なものを探る】

- ・現在のプログラムの効果を、訓練者の技術、フォロー・アップ等々の面で評価する。
- ・求められる技術を判断した上で現在のMRAの訓練を評価する。既存の訓練の機会とそれを必要とする国々に注意を払う。
- ・導入用のパッケージ/ビデオ、種々のプログラムを紹介するグローバル・ユース・ネットワーク・ホームページ、トレーナーの訓練、新しい若い血を入れること、各MRAの組織体への若い世代の登用等を含む新しい領域の開発を試みる。

6. 歴史の傷を癒す

【歴史的に分裂したグループ間に真のパートナーシップが育つよう助け、融和した公正な社会を築く。同様のビジョンを共有する個人及び組織と共に活動する。このためには次のステップが基礎となる。1. お互いの話を聴く 2. 過去の傷を認識する 3. 謝罪と許し 4. 尊厳と公正さの回復の達成】

既に各国で歴史の傷を癒すための諸活動が進行しているが、その他に今回次のようなビジョンが表明された。

- ・韓国：韓国と日本の間の溝を埋めるため学生同士の対話を行う。

- ・マレーシア：多宗教間・多文化間の対話の継続。
- ・サモア：家族への癒しと若者の希望の回復
- ・ベトナム／オーストラリア：恐れと不信という負の遺産を清算するためベトナムとオーストラリアに住むベトナム人青年の間に良い関係が築かれるような活動を行う。
- ・インド：インドの先住民であるアディバシの人々の状況を知らしめると同時にプロジェクトを通して教育を行う。
- ・カナダ：オーストラリアでMRAの人々が中心的な役割を担ってアボリジニの人々に謝罪の意を表わす国民運動を起こした事例を参考に、オーストラリアの関係者を招いて、カナダにおいて、ファースト・ネイション（ネイティブ・インディアン）の人々との和解を図る。

7. 教育

【ホーホーで表明されたイニシアティブは全て、親、学生、教師にも関わることなので、彼等の積極的な参画を促す。】

- ・インドで育ちつつある教師のネットワークを活かした教育関係者の国際会議を2003年に開催する。
- ・自分達のものとは違う文化や信仰について、幼児期から学ぶ事が重要であるとの認識を高められるようにする。

8. その他

アジア・プラトーを様々な信仰を持った、多国籍で多様な世代の人々のコミュニティーとする。環境、ビジネス、教育、家庭生活、リーダーシップ・トレーニング等の各分野において変革のイニシアティブがこのアジア・プラトーから生まれて来るようにする。

(以上)

中山啓介さんは、日本でもMRAにこれまで関係された方々に広く呼び掛け、日本版のホーホーを開催したいとの考えを示されました。私は、今回インドでも、韓国の若い青年達と夜遅くまで話す機会を得ましたが、改めてアジアの国々の多くの人々が未だに日本による心の傷を癒すことが出来ていない現状に思いを致し、アジアの国々の人々との真の和解を図ると共に、現在も内戦や貧困等々に苦しむ世界の人々のために一緒に出来ることを探る機会を設けたいと考えました。今回のホーホーは、色々な意味で意義深い会議となりました。（長野 清志記）



●アフリカ各国からも多数の参加者があった

◇◇イニシアティブス・オブ・チェンジ◇◇

9月11日のNYの自爆テロ事件以来、戦争の犠牲となっているアフガン難民の痛々しい姿が連日マスコミを通じて目に入ってきます。しかし、この地域は戦争状態が過去20年も続いており、政治、経済、教育、医療など当然国民が享受すべき社会基盤もほとんどないまま、人々は飢餓、病気、寒さに苦しみ死者が続出していることを知り、心が痛む思いです。

私たちMRAでも何かのお力になればと、アフガン難民支援募金を提唱して始めましたところ、大勢のMRA会員の皆様からの心暖まるご支援を頂きまして、合計72,631円になりました。全額MRA事務局から「難民を助ける会」へお送りさせて頂きました。皆様からのご協力に対して心より感謝申し上げます。

最近の新聞の報道によりますと、「アフガニスタン復興に向けて日本のNGOがアフガン国内での活動を本格化させた。外務省とも協力して「ジャパン・プラットフォーム」を組織し、日本からの支援物資や募金の呼びかけをしている」とのこと。「助ける会」もこの組織の下で難民支援に加えて地雷除去活動にご尽力されています。このようにNGOと政治の連携活動こそ21世紀の望ましい方向であると嬉しく思います

(会員 中島信子)

「和解を政治の現場に生かす：コー政治円卓会議の歩み」

MRA推進議員連盟事務局長(国際MRA日本協会理事)

藤田 幸久

・コー政治円卓会議(PRT)は1997年8月に誕生し、以来毎夏開催されています。前年のコー50周年記念大会に出席した鳩山由紀夫代議士が、「世界の指導者がコーの精神で世界の根本問題を話し合い、解決の努力をしたら素晴らしい」と提唱したのが始まりです。

第1回円卓会議は、こうした経緯から、前年の世界大会に参加した日本の超党派の国会議員5名が署名をして、招待状が各国に発送されました。現在は赤十字国際委員会前総裁でMRAコー財団のソマルガ理事長一人の署名となっています。第1回円卓会議を前に、日本の国会議員は、主権国としての責任を果たすために議員連盟を結成することになり、1997年6月に「MRA推進議員連盟」が設立されました。羽田孜会長、谷川和穂副会長、鳩山由紀夫副会長、狩野安幹事他が役員で、現在の登録議員は45名です。設立総会では、インド独立の父ガンジーの孫でもあるラジモハン・ガンジー元上院議員が記念講演を行い、その模様は産経新聞に連載されました。

毎年の会議には30~40名が出席しますが、「和解への課題」というMRA世界大会の全体会議に出席する紛争地域の当事者が多く参加することが特色です。カンボジア、ソマリア、レバノン、イスラエル、インド、パキスタンなどの当事者から、政府同士の交渉ではないコーという信頼に満ちた場で、食事の時間も含め、生の情報と紛争解決の努力をオフレコで直接聞けることが最大の特徴です。

1997年のカンボジアのクーデター直後に参加した、亡命中の国会議員の出席は翌年の総選挙の実現に



●韓国の方々と(左から谷川和穂議員、李柱栄議員、藤田幸久氏、柳在乾議員、羽田孜議員、羽田次郎氏、金太智元駐日大使)

役立ちました。99年の最貧国債務削減問題の討議は、議員連盟を通して翌年の沖縄サミットで日本政府の政策転換に生かされました。2001年にソマリアの元大使から、小型武器と死の商人の暗躍こそ内戦とテロ活動の元凶であるとの訴えがありましたが、9月11日の同時テロ事件でその意味を実感しました。教科書問題や靖国神社問題で日韓関係が荒れた2001年夏の会議では、韓国側議員からその問題についての言及はほとんどなく、むしろMRAを基盤にした日韓関係を築きたい、そしてそのために、日本にならって議員連盟を創設したいとの決意が表明されました。12月にはMRA推進議員連盟の会議に早速、韓国の代表が来日し、本年は韓国の議員連盟の会議に日本側が参加する予定です。

コーの和解の精神を、もっと政治の現場に生かしていきたいと思います。

(以上)

チェンジの体験をお寄せ下さい

MRAが、世界的にその日常活動に使用する名前をイニシアティブス・オブ・チェンジ(Initiatives of Change、略称IC、仮訳『変革のさきがけ』)と変えることが決まったということは、前号のIMAJニュースでお伝えした通りです。そこで、MRA(IC)の信条である、自ら率先して変わった、あるいは、変革のためのイニシアティブを取ったという具体的な体験やその結果を、どんな身近な事柄でも結構ですので、是非MRA事務局までお寄せ下さい。

▼▼ CRT 部会ニュース ▲▲

第3回 経済人コー円卓会議日本委員会主催で講演会を開催

石田 寛 (CRTアシスタント・コーディネーター)

昨年10月19日(金)の午後13時から18時まで『企業評価の新しい基準—コーポレートガバナンスとステークホルダーマネジメント—』のテーマで経済人コー円卓会議日本委員会 (Caux Round Table—Japan : CRT-J) 主催の講演会が経団連・東京証券取引所及び社会経済生産性本部の後援を得て、経団連会館国際会議場において開催されました。

水尾順一駿河台大学教授の進行により、まず最初に2001年9月のCRTロンドン国際会議に参加した水尾順一経済人コー円卓会議日本委員会セクレタリアト・アドバイザー及び金子保久経済人コー円卓会議日本委員会主幹事(国際科学技術財団事務局長)から、「2001年経済人コー円卓会議ロンドン国際会議の報告」が行われ、西口徹朝日生命社会貢献室長からは「会社を変える、社会も変わる—朝日ライフSRI社会貢献ファンド‘あすのはね’—」、荻野博司朝日新聞論説委員からは「ステークホルダーが企業社会変革のドライブとなる」、そして最後に水尾順一先生からは「21世紀型ステークホルダーコーポレーション—セルフアセスメント&ソーシャルオーディットが変革の羅針盤—」と企業評価の新しい基準に関するテーマでそれぞれ講演が行われました。

休憩時間には、コーヒーを手にくつかの場所で小さなグループが形成され、参加者同士で企業の社会的責任のあり方や社内でもう取り組んでいけば企業倫理

の考え方が社員一人ひとりに浸透するのか、といった日頃抱えている問題について話しが弾んでいたことが大変印象的でした。その中で、CRT事務局に対して、何人かの参加者より20~30人規模の勉強会を是非始めてほしいとの要望もありました。これについては、現在事務局サイドで検討中です。

100名余りの各企業の参加者からは、「今回の講演会に参加して日本企業が透明性・倫理的行動・社会的貢献・環境問題などで変化していく必要があることを痛烈に感じた」、「当社では、現在コンプライアンスへの取り組みを進めているが、中長期的な『企業』としての在り方を考える上で、大変参考になった」等、企業倫理への関心の高まりを示す感想が寄せられました。

また、主催者を代表して最後に参加のお礼を述べた小笠原敏晶経済人コー円卓会議日本委員会会長(ニフコ会長/ジャパントイズ会長)は、「日本でも、企業の社会的責任や企業倫理活動への取り組みは確かに高まっていますが、毎年CRTの国際会議に出席して、欧米と日本の差は次第に広がっているのではないかと危惧しています。従って、CRT—J委員会としても、このような講演会の開催も含め、企業の社会的責任や企業倫理、あるいは企業統治の問題について、皆さんと共に考える場を提供し、お役に立っていきたくと考えています」との言葉で締めくくられました。

(以上)



セネガルと就学前教育



アメリカ・タフツ大学フレッチャースクール修士課程在籍 松本佳子

私がMRAに初めて接したのは、大学2年の夏でした。台湾で開催された1992年のAPYCに参加させていただいたのが、米国で15歳の夏を過ごして以来初めての、文字どおり一人で出かけた海外経験となりました。19歳のまだ多感な時期に、MRAを通して、宗教、国籍、肌の色等の違いを超えて、友情を結ぶこと

ができること、国と国の関係が個人と個人の関係から始まることを、経験を通して学ばせていただきました。約10年が経ようとしています。私がおの時に学んだことは、現在でも生きています。その後、キューバ、メキシコ、モーリタニアを訪れ、様々な人との出会いの中で、改めてMRAを通して学んだ個人を尊重し、

個人から始まる人間関係の大切さを実感してきました。2000年夏より、ボストンの大学院に留学し、世界各国から来ている留学生および米国人学生との付き合いの中でも、日々応用しています。

アフリカに魅力を感じる自分の心と将来の職場としての現実性を、自分の中で確認するため、昨2001年の夏2ヶ月間、西アフリカのセネガルで就学前教育のインターンをしました。改めてアフリカの人々の良さにふれ、その地で仕事をしたいとの決意を固めました。以下、セネガルの就学前教育を含め、アフリカの子どもたちの教育環境について、ご紹介します。



●セネガルの子供たち

1. 就学前教育とは

就学前教育とは、セネガル国の家族・子ども省の定義によると、初等教育課程にあがる前の3歳から6歳までの子どもを対象とし、遊びを通じて、子どもの精神的・心理的・知性的な成長を促すものとされています。2000年3月の政権交代後、ワッド大統領のイニシアティブの下、0歳から6歳までの子どもの円滑な成長を促進するため、セネガル国でも先進国と同様、初等教育以前の発育・教育環境を整えるべきだという新たな政策構想が打ち出されています。

2. セネガル国就学前教育の現状

就学前教育は、初等教育の質の向上に密接に関連しています。セネガル国の初等教育就学率は、1990年から2000年に全国平均で5.1%漸増していますが、初等教育の質は必ずしも向上しているとは言えません。学校設備の不足・質の低さ、教材の不足、教師の不足・質の低さ、不適切なカリキュラム、実生活への教育効果の低さなどから、初等教育課程で落第または留年する生徒が多いのが現状です。加えて、近年の幼児の成長過程に関する研究により、0歳から3歳までの幼児期における適切な刺激の欠如が、後年子どもの教育へ悪影響を与えることが指摘されており、初等教育以前の「就学前教育」の必要性が国家政策として強調されるようになったのです。

3. アフリカの教育の現状

先進国では、子どもが小学校に行くことは義務であり、歴史的に子どもの権利として獲得されたものであることは、意識的に捉えられることはありません。しかし、小学校に行けない子どもがアフリカには

たくさんいます。その理由はさまざまですが、国家予算の不足のため、すべての子どもに小学校へのアクセスを提供することができないことが、最大の理由です。小学校の数を増やすため、国際機関や先進国の援助により、校舎の建設が急がれています。しかし、学校教育は、生徒と教師と教材があって初めて成り立つものですから、教師の訓練・育成も同時に急がなくてはなりません。アフリカでは、まだ教材を旧宗主国であるヨーロッパから輸入している国も多く、値段が高く手に入り難いため、何人もの生徒で一冊の教科書を利用することは珍しくありません。

学校に行くことのできない子どもは、家計を手伝うために働き、教育の機会を奪われます。都市から情報の伝達に時間のかかる地方の村では、親の識字率が低く、教育に対する理解が喚起されていないため、子どもを学校に送るよりも、家計収入の増加が重視されてしまいます。教育の必要性が認識されたとしても、金銭的に子どもの教育費用を支出できない家庭が多く存在します。

エイズによる深刻な影響により、親を失った子どもの数も増加しています。このような子供たちは、祖父母の養育下に入るか、親類が面倒を見ることとなりますが、一家族の平均的な子どもの数が5～7人の大所帯では、すべての子どもに教育の機会を与えることは難しく、相対的に女の子の教育の機会が犠牲となります。社会文化的な慣習より、女性は低年齢で結婚をすることが多く、識字率向上を妨げる一因となっています。

4. セネガルの子どもの将来は？

上記の通り、アフリカの子ども、セネガルの子ども

を取り巻く環境は、厳しいものですが、彼らの将来は今後変えていくことができます。就学前教育はその一環です。国が貧しいことと、心が貧しいことが必ずしも一致しないことを、アフリカの子どもの笑顔とたくましさは教えてくれました。セネガルの首都、ダカー

ル(パリダカでご存知の方も多いのでは?)の通りで、歯磨き粉を売って歩いている幼い男の子の賢そうな目は、教育の機会が与えられたなら、どれだけの可能性を引き出すことができるか、私に訴えていました。彼らの将来のための一助となることが私の願いです。

(以上)

◆ 訃 報 ◆

残念ながら昨年(2001年)の10月より年末に掛けてMRAに縁の深い3名の方々が逝去されました。心よりご冥福をお祈りします。

スタン・シェパードさん

日本の良き友人であった、オーストラリアのスタン・シェパードさんが、昨年(2001年)の10月17日(水)に心臓発作により亡くなりました。(享年78才)

1973年からは、MRAのミュージカルグループである『ソング・オブ・アジア(アジアの歌声)』の参加者の青年たちと世界を回り、彼らから父親のように慕われました。その後も、「日本の若い人たちを国際人に育てるための訓練コースを作りたい」との要請に応え、オーストラリアのスタディコースを1977年に発足させ、これまでに日本の多くの青年たちを初め、アジア・太平洋を中心にした世界各国の青年たちがその恩恵を受けてきました。

ご葬儀は10月24日(水)の午前10時よりアデレードの教会にて執り行われましたが、世界各国からの弔電やマレーシアや台湾から駆けつけた参会者の弔辞を耳にし、葬儀を執り行った司祭の方が、「一人の人間がこれほどの影響を世界の人々に与えられるのは信じがたいほどです。」と感嘆されました。

加藤 シヅエさん

昨年(2001年)の12月22日(土)に呼吸不全のため亡くなりました。(享年104才)

家族計画運動、婦人参政権運動等、女性の地位向上のために尽くされ、戦後初の女性国会議員としても二十八年間にわたり活躍された加藤シヅエさんは、1951年にアメリカ・ミシガン州にあったMRAセンターでの国際会議に参加されたことをきっかけに、「傲慢だった自分に決別する」という決心をされました。

その後、1957年にフィリピンのバギオで開催されたMRA国際会議での韓国の代表やフィリピンの人々との和解を初め、日本と各国の人々との関係改善に大きな貢献をされました。又、1960年の安保闘争という難しい政治問題の渦中でも良心に従うという決意をされ、政治生命を賭して全国紙に公開状を寄せ、国の分裂を招く社会党の政策の転換を訴えられるなど、MRAの創始者のブックマン博士が日本に与えた『日本はアジアの灯台に』というビジョンの実現のため、幅広く活躍されました。

中嶋 勝治さん

昨年(2001年)の12月26日(水)に腎不全のため亡くなりました。(享年86才)

1950年にMRA国際チームの招きで、戦後初めての大きなミッションとなった、政治家、経済人、労働組合代表等からなる72名のグループが、スイスのコーを初め、欧州を訪問しました。中嶋さんも、当時、全日本金属労連執行委員としてその一行に加わりましたが、コーで、仇敵と見なしていた鈴木栄二大阪市警視総監と劇的な和解をされ、国の融和のために一緒に働くことを誓い合われました。以降、MRAの専従として大いに活躍されました。

去る1月12日に開催されたMRA例会での基調講演の要約をご紹介します。

テーマ『私にとっての“静かな時間”』

矢野弘典 日経連常務理事（国際MRA日本協会副会長）

私は今、日経連で政策関係の仕事をしていますが、長いあいだ東芝に勤務して、そこで育ててもらった人間です。昭和50年代の初め頃から、東芝労使でコーに出掛けるようになりましたが、そのきっかけというのは、戦後、昭和20年代に、石坂泰三さんが初めてコーに行かれ、その後、東芝の労使関係の役員をされた、河原亮三郎さんが、労使でMRAに行かれました。そういう長い歴史がありましたが、しばらくそのような活動が途絶えていたのが、昭和51年に東京でMRAの国際会議をやるということになり、その時にお手伝いさせて頂きました。これは良いと、翌年から、労使のチームで、コーに行くようになった訳です。

この51年の会議には世界中から色々な方がお見えになり、本当に素晴らしい人がいると思いました。ブックマン博士の書物も幾つか読みましたが、内に大きな情熱を抱いた本当に素晴らしい人達がいると感銘を受けました。

その後、コーには10回位行きましたが、東芝の労使で一緒に行ったのが最初の数回軌道に乗るまでの間です。行く度に素晴らしい人にお会いしました。中でも心に残る人は、ノルウェーのイエンツ・ウイルヘルムセンさんです。コーのマウンテン・ハウスで、たいてい同室になりました。この人が、朝起きますと、ベッドの上に半身を起こして、手帳に何か一所懸命書いていました。何をしているのかと思って見ると、彼がスピーチをする時間に、そのメモを引っぱり出して、色々話しをしました。ブックマン博士の本、或いは皆さんのお話を聞くと、そういう時間を、皆さんそれぞれに、自分の都合の良い時間に持ち、考えを整理するという生活の仕方をされています。

MRAの一番の素晴らしさは、こういう時間を一人ひとりが持つというところにあると信じています。何をどんなふうと考えて行くのかということが問題ですが、やはり、自分の心を、深く掘り下げていって、生まれてくるものに心を委ねるといった生活態度は本当に素晴らしいものだと思います。

近頃は日本も、経済は良くないし、失業は増えるし

という状況ですが、私も仕事上、雇用や、少子高齢化に向かっての社会保障や、国際関係の中での日本の歩むべき道等を考えます。日本が今やらなければ、将来に禍根をのこす、次ぎの世代に負担を先送りするような、そういう状況を続けていたら、日本は破綻する。やはり今、本当に改革しなくては行けないという決意で、仕事をしている訳ですが、問題が増えて行くほど、自分が相当しっかりしていないと、人様に物が言えないという感じを強くする次第です。

私も及ばずながら、真似から始まりまして、静かな時間を持つように努力しています。近頃は朝の方が得意になりました。朝の方が、静かで良いのです。昼間は、1分1秒を争って暮らしていますので、とてもそういう時間は持ちにくい。それで、朝早く起きて、静かに考える時間を持ちます。20～30分位ですが、朝は夜の5倍位の集中力があるのではと思います。ですから15分位やれば、昼間或いは夜の1時間分ぐらいのことが出来ます。本もあつという間に読めるし、何か書く時も、朝の時間は非常に良いのが分かり、もっぱらそういう暮らし方をしております。

最近は忙しくなればなるほど、朝、早い時間が楽しみになってまいりまして、山程の懸案事項があるのですが、それを考えて、良いことを思いついたら、メモをして、事務所に行ったら、失敗することもあります。夜になったら、「寝てる間にひとつ答えを考えて下さい」と心の中に囁いて寝ますと、朝起きて良い知恵が浮かぶということもあります。こういうことから、心というのは大変なパワーの源泉なのではとつくづく思います。

心理学の本によれば、人間の心というものは、顕在意識が上にあつて、その下に大きな潜在意識という、タンクみたいなものがあるようです。顕在意識というのは目が覚めている心ですが、大体5パーセント位だという説もあります。フロイドとかユングとかが、その世界を解剖しました。氷山の一角、海面上に出ている、意識の世界というのは5パーセント、その下の世界が90～95パーセントなのです。これはいわば、眠らない心です。

その意識の中にも、色々な階層があります。一番上に出ている顕在意識は、良いとか悪いとか判断する理性の層です。ところが、潜在意識というのは、家族意識もあるし、人類意識もあるし、宇宙意識もあって、とにかく自分が頭で考えたわけでもないのに、何となく身体が動いているというような、いわば、習慣の心の様なものが我々自身の中にあります。

ですから、寝る前に、この難問はどうして解いたらよいかと、潜在意識に問いかけ、綺麗さっぱりと熟睡する訳です。起きても答えが出て来ない場合も多いですが、時々、こんな簡単なことだったのかと思ひ当たります。世の中には良いことも悪いこともあります。争いもあります。そんなことが一杯ゴミ溜めのように心の中に溜まったまま家に帰る訳ですが、「何とか潜在意識よ、良く考えてくれ」と言いますと、気楽に重しが取れて、熟睡出来る訳です。潜在意識というのは頼もしいサイレント・パートナーではないかと思ひます。

もうひとつ、突き詰めて行きますと、人間というのが、地上に出て来る水だとすると、その水脈はものすごく深く地下に掘られていて、そこからの水の供給量は、人間の単位から言えば無限の水が湧き出て来る、そういう泉を見つけたようなものではないかと思ひます。地下水のようなサイレント・パートナーではないか、本当に困っている時に教えてくれる存在ではないかとなりますと、非常に心強い味方がいるという気分になります。自分に対し、非常に厳しい批判をしてくれるのが、このサイレント・パートナーであり、他人には聞こえなくても、自分には聞こえるのです。人によってはこれを良心と言ったり、或いは、神とか仏と呼ぶのだと思ひます。それが自分を、褒めてくれることもあるし、批判してくれる時もあるし、問題を解決してくれる時もあります。そういうサイレント・パートナーに向き合うことが大事なのではないかと、最近、思ひます。眠い時もありますが、朝早く起きて、自分の声を聞いてみるのは、なかなか良いものだと思います。忙しくなればなるほど、そういう時間が必要だと思ひます。

問題を解決しようとしても、自分自身がしっかりしなければ、何も始まりません。自分の家族があり、会社があり、或いは国家があり、世界がある。そこで起こっている問題は、やはり、自分が解決をするべきものです。その時に一番良いと思ひたことをやるしかありません。

そういう時に勇気付けられたり、知恵が湧いて来たりというのは、自分の中に深く思いを致して、自分を内省するということからしか生まれえないのではないかと思ひます。

それから最近の国の問題、社会の問題を考える時に、一番大事なことは何かと言ひますと、それは志と言ひことだと思ひます。経済が低迷したり、失業が増えたり、或いは犯罪が増えたり、学生が勉強しなくなったり、世の中に悪い面が一杯あることも事実ですが、それを変えるにはどうしたら良いかと言ひすと、やはり、それぞれの場にある人が、志を持ってやるしかないだろうと思ひます。高い志を持った人が一人でも増えれば、世の中は変わって来ると言ひことなのです。漢字の志という字が、実に素晴らしいと思ひるのは、分解すると士の心となります。士とは、ある意味では論語以来の中国思想、或いは日本思想の根本にあるものです。つまり、リーダーです。男でも、女でもよい、歳が上でも、若くてもよい。少なくとも家族の一員として、社会、企業、組織の一員として、或いは国家の一員として、何事かを成そうとする人間を士と呼ぶ訳です。

これは、西洋にも、ノブリス・オブリジェ、つまり高い立場にある者の義務という言ひがあります。ノーブル・オブリゲーション、リーダーたる者の心構えであり、自分の損得を忘れてやる言ひことなのです。人の上に立つべき者が自分ばかり良ければと私利私欲に走るのでは、士の心というものを持たない存在であり、リーダーたるに値しないと思ひます。志は古い言ひなので、何か横文字で良い言ひはと考へたのですが、パブリック・マインドという言ひが良いのではないかと思ひました。公の為に尽くす心です。公というのは、何も巨大な公でなくても、身の回りでもよい、職場でもよいし、一番身近には家族だと思ひます。そういうものに自分を捧げる心というものが、志の根本だろうと思ひます。

そういう気持ちを多くの人を持つことが、この国が良くなる元ではないか。私はMRAの皆様にお会ひした25年程前に、心に触れた、情熱を持った爽やかさというものは、志ということではないのかと思ひ、そのように考へる端緒を与えて頂ひたMRAの皆様方に、心から御礼を申し上げたいと思ひます。

これから日経連は経団連と5月に統合致しまして、新しい経済団体が生まれます。新しい団体は、人間尊重の精神という志を掲げて活動してまいります。

MRAの新しい会長が日経連の副会長をなさっておられる橋本さんであること、これは素晴らしい人選であり、本当に良い方を選ばれたと思います。

私も誠に微力ではございますけれども、お役に立てるようにしたいと思っております。

(以上)

▼▼MRA ニュース短信 ▲▲

◇年末懇親会◇

昨年12月8日に第35回通常総会に続き年末懇親会が高輪の開東閣で開催されました。年末にも拘わらず60名余の参加者がありました。橋本新会長からは、「文明の共存と和解が求められている新しいグローバル化の時代にあって、ますます、MRAの精神を発揮し、それを広めてゆく運動を力強くやっていかなければならない。来年、2002年は、その大きな第一歩を踏み出す年にしたい。」との挨拶がありました。ゲストスピーカーの羽田孜元首相は、9月11日の同時多発テロに言及され、「今こそ、MRAの活動が大事である」と述べられ、植竹繁雄外務副大臣はMRAのローランド・ハーカー氏が中学時代の英語の先生で

あったというMRAとの関わりに触れると共に、MRAへの期待を述べられました。その後も、400名の女性会員を擁する東京フォーラムの荒井佐よ子代表は、「加藤シヅエ先生と相馬雪香先生の後に続いて社会、世界のために出来ることをと13年活動を続けて来ました。MRAは、日本の社会に、将来に、非常に大きな役割を果たせると信じています。」と述べられました。又、カンボジアの地雷撤去のためのNGOを主宰している立命館大学の鬼丸昌也さんの「私達一人一人の心の地雷の撤去をしよう」という呼びかけや、グループ21の岩倉康子さんの素晴らしい歌等もあり大変充実した会となりました。

◇相馬名誉会長の『卒寿を祝う会』◇

相馬雪香名誉会長の『卒寿を祝う会』が去る1月25日にMRA、難民を助ける会他7団体の共催で開催され、与野党の国会議員、ビジネスマン、ジャーナリスト、歌手やスポーツ選手など多彩な各界からの550人以上の方々がお祝いに駆けつけました。参加者を代表して、羽田孜元首相と三木睦子元首相夫人が挨拶され、相馬名誉会長の難民救済を初めとする世界の人々のためのこれまでの活動を賞賛されました。

寄せられた内外からの沢山のメッセージの中から、中曽根康弘元首相、1997年度ノーベル平和賞受賞者のジョディ・ウィリアムズさん、そして小泉純一郎首

相のメッセージが紹介されましたが、特に中曽根康弘元首相は、1950年の初めてのコー世界大会に参加したことが、その後の政治生活に大きな影響を与えたと、その縁を作られた相馬名誉会長への感謝を綴られました。

これらの祝辞に応じて、相馬名誉会長は、グローバル時代に必要な心を、『あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな』という明治天皇の歌を引用されて、「広い心をもって世界に日本人の善意を示し、世界からの信頼と尊敬を受けられるようにしよう」と訴え掛けられました。

◇第25回MRA小田原国際会議◇

本年のMRA小田原国際会議は、来る6月7日(金)から9日(日)にかけて小田原のアジアセンターにて、『21世紀を対話と和解の世紀とするために～一人ひとりが変化をもたらすイニシエーターとなろう～』のテーマで開催される予定です。この会議には、インドでMRAの研修を受けている世界各国からの様々な背景を持った青年の内、南アフリカ、モルドバ、レバノ

ン、オーストラリア、ニュージーランド、そして韓国の青年が来日する他、韓国や台湾等の方々も来日の予定です。又、6月16日(日)には、同様のテーマで、主だった宗教の指導者や、政治家、経済人をパネリストに迎えた会議を東京でも開催する計画です。どうぞ、皆様のご予定にお入れ下さい。案内状ができ次第改めてご案内いたします。

今夏のコーでは下記の7つの会議が開かれます。詳しくはMRA事務局にお問い合わせ下さい。

△△ 2002年コー世界大会プログラム▽▽

総合テーマ『人間の安全保障のために世界に対して責任をとる』

■7月5日(金)～10日(水)

テーマ『奉仕、責任、リーダーシップ～健全な世界を作るために～』

この会議の最初の週末には1946年に会議場となったコー・パレス・ホテルの建設100周年記念のお祝いの行事が予定されています。同時にこの100年間の世界の劇的な変化から学び、未来へのインスピレーションを探る機会ともなります。

■7月12日(金)～18日(木)

テーマ『和解と公正さのためにコミュニティ同士を結び付ける～誰をもを排除しない社会を目指して～』

■7月20日(土)～24日(水)

テーマ コー産業人会議『グローバルイゼーション～対立ではなく好機となすために～』

■7月27日(土)～8月3日(土)

テーマ 芸術会議『再生への道』

■8月4日(日)～8月10日(土)

テーマ『和解への課題 ～平和作りのイニシアティブ～』

■8月11日(日)～8月12日(月)

テーマ『世俗的な社会での精神的要素』

■8月13日(火)～8月18日(日)

テーマ『和解への課題 ～変わりゆく世界における人間の安全保障～』

☆アフガニスタン支援のためのご寄付のお願い☆

2ページの共通のビジョンに示しましたように、アフガニスタンの人々が国の再建と和解を図る上で、MRAは独自の役割を果たしうるとの確信の下、世界各国が連携しての活動を始めようとしております。つきましては、これら数々のプロジェクトの実現を可能にするため、アフガン・ファンドをAfR(「和解への課題」)基金の下にサブ・ファンとして発足させ、各国で募金活動をするようになりました。ご協力下さる場合には、次の口座にご送金願えれば幸いです。宜しくお願いいたします。

郵便振替口座 東京00180-0-38289 口座名： 社団法人国際MRA日本協会

事務局便り

◇羽田次郎さんを初めとする方々にボランティアでお手伝い頂いたお陰でMRAのホームページが開設されました。今後、更に内容を充実させて行きたいと思っております。皆様も是非ご覧下さい。

<http://homepage3.nifty.com/mra>

尚、現在、CRTのホームページの開設の準備も行われております。

◇相馬雪香名誉会長の本が二冊出版されました。双方ともご両親からの教えや、MRAから受けられた影響にも触れられた大変良い内容のものになっております。是非、ご一読頂きたいと存じます。

- 1.『あなたは子どもに何を教え残しますか』 祥伝社 ¥1,600+税
- 2.『相馬雪香の90年 心の開国を』 中央公論新社 西島大美(ひろよし)著 ¥1,800+税

◇どうぞ本年も宜しく願い申し上げます。本年初めてのIMAJニュースとなりますが、何かお気づきの点、ご要望等がございましたら、ご遠慮無く事務局までお寄せ下さい。